



## 原初的コミュニケーションからみた自閉症のことば

小林 隆 児\*

### はじめに

自閉症にみられることばは、定型発達の図式に照らし合わせると、一見非常にユニークな印象を与えるため、これまで自閉症研究の中で常に中心的課題として注目されてきた。それは単に定型発達の単純な（量的な）遅れとして捉えることは困難で、質的な障害（ICD-10）と見なされ、自閉症の成因を考える上でも重要な位置を占めてきた。ただ、これまでの言語発達とその病理を検討する際に取られてきた視点は、言語機能がどのような経過をたどって発達していくかという子ども自身の言語能力発達における評価を軸としたものであった。言語機能がどのようにして獲得されていくか、その発達過程を養育者との関係を含めてダイナミックに捉えていくという最も重要な視点がそこには欠落していた。

自閉症の一義的問題として再び社会性の発達が注目を浴びる中で、そもそも社会性はどのようにして深まり広がっていくのか、つまりはコミュニ

ケーションの発達過程について再検討が求められている。本稿では、コミュニケーションの発達過程の中で、話しことばや身振りが生まれる以前のコミュニケーション、すなわち原初的コミュニケーションの生成過程との関連で自閉症にみられる（話し）ことばの問題を捉え直してみよう。

### 印象的な事例から

T男 成人期 自閉症施設入所  
〈知的発達水準〉 重度精神遅滞

簡単な質問にもオウム返しでの応答が目立ち、ことばの理解は困難なことが多い。

乳児期、母親が抱っこすると丸太ん棒を抱きかかえている感じがした。母親になつくことなく、歩き始めると多動が目立つようになり、幼児期が最も烈しかったという。この頃から洗剤やシャンプーの容器を集めて整然と並べることに没頭していた。喃語様発声が一時期見られたが、まもなく消失した。その後今日までことばはさほど増えていない。多動であったので、向精神薬（詳細は不明）を成人になるまで服用していた。2年間の就学猶予の後に、小学校の特殊学級に入学した。5年生で養護学校に転校。小学校時代、トイレへの関心が強かった他は大きな問題もなく、中等部、高等部を卒業した。

卒業後、ある入所施設に2年間いたが、周りの人々との発達レベルの差が大きく、みんなの動きについていけなかった。その後は通所施設に通い始めた。受け身的態度が目立ち、周囲の人の指示には従うので、比較的問題はなかったが、次第に意欲のなさが目立つよ

Speech of people with autism in the viewpoint of primitive communication

\*東海大学健康科学部社会福祉学科  
[〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台]

Ryuji Kobayashi, M.D., Ph.D.: Faculty of Social Work, Tokai University School of Health Sciences, Bohseidai, Isehara, Kanagawa, 259-1193 Japan.

うになっていった。数年前に現在の自閉症施設に移った。

烈しい行動障害は見られないが、意欲低下、自発性の乏しさが目に付く成人期自閉症である。いまだ母親をととても頼りにして、母親のそばを離れず、母親の手を握り続けているのが印象的であった。

入所当初は、周囲に対して警戒的な様子を見せていた。あることを思い立っても、それが思い通りにならないと、すぐに自傷を示すことが分かってきた。烈しい自傷が入所当初は見られたが、指導員がT男を居室まで連れて行き、興奮が治まるまで手をにぎったり、身体を抱いたりして、彼が落ち着くのを待った。そのような対応を重ねることによって、彼の自傷は次第にゆるやかなものになっていった。その後さほど大きな混乱もなく、指導員に少しずつ頼るようになり、何か困ったことがあると、すぐに指導員に助けを求めるようになった。

現在の施設の指導員が彼の自発的な行動を重視して接することにより、T男は入所後1年余り経過した頃から緊張は随分和らいでいった。指導員の応答にも自傷で反応することは激減した。

ただ、周囲の騒々しい雰囲気をととても嫌がることはずっと続いていた。しばらく観察しているうちに、T男が特に嫌がっている住人（当施設では入所している自閉症の人々をこのように称している）はN男であることが分かった。そこで指導員はT男が興奮している時、T男に「N男くん、うるさいね」とか「N男くん、うるさくて嫌だね」と彼の気持ちを代弁したつもりで声をかけたが、彼の興奮は一向に治まらなかった。まもなく指導員のそばに寄ってきて（サワイデイルネ）と指導員に同意を得るかのようになってことばを発するようになったが、指導員が同意して「そうだね。騒いでいるね」と応答すると、なぜか自分の手を自傷していた。N男の騒々しさを嫌がり、（N男クン、入院シマスカ）と指導員に語りかけた際に、指導員が字義通り「N男くんは入院しないよ」と応えると、すぐさま自分の手に噛みついてきた。N男くんの存在に不快な反応を示していたことは明らかであったが、この頃、指導員はまだ彼の応答に戸惑いを禁じ得なかった。

2年ほど経過した頃、家庭の事情で週末施設に残らざるを得なくなった。その時は表立っては混乱することもなく、平穏に過ごしたが、T男自身は母親と離れて生活することがとても不安であったらしい。N男が騒いでいない時でも、（サワイデイルネ）と指導員に訴えることが多くなった。T男がこのように訴える時は夕食時が多かったことに気づいた指導員が、T男に「N

男くん、夕食前でおなかが空いたと言っているんだよ」と話すと、意外にもT男の興奮が治まり、納得した表情になった。その後、N男が騒いでいる時にT男が（サワイデイルネ）と言ってきた時、指導員が「N男くん、おなかが空いて、ごはん食べたいと言っているんだね」と答えると、T男はニコニコして納得した表情になった。

しばらくしてT男が（N男クン、サワイデイル）と指導員に繰り返して訴えかけるようになった。実際にはN男は騒いでいなかったのに、指導員が「N男くん、静かだよ」と答えても、なお（N男クン、サワイデイルネ）と執ように繰り返した。まもなく指導員は、彼自身が（おなかがすいて）落ち着かないことをこのように表現したのであろうと察しがついた。そこで「T男くん、おなかがすいたね。早くごはん食べたいね」と応じると、彼はニコニコしながらとても納得のいく表情を示した。このように指導員との間でコミュニケーションが円滑に運ぶようになると、入所当初は自分の身体を触られるのをひどく拒否していたにもかかわらず、指導員に爪を切ってもらうことを受け入れるまでになった。

#### 1男 関係支援開始時3歳4カ月

（主訴）ことばの遅れ、かんしゃく。

（家族構成）父（会社員）、母（専業主婦）と1男の3人。育児に協力的で優しい父親。母親も優しく、受容的である。

（知的発達水準）DQ62（津守式発達検査） 軽度精神遅滞

胎生期、切迫早産の危険性があったが安静にしていた時期がある。39週で吸引分娩にて出産。3カ月、首のすわり。7カ月、起座。10カ月、始歩。歩けるようになるまで、母親が抱っこをしていないと、泣いてばかりいた。人見知りははっきりしなかったが、初めての場所にとっても敏感に反応していたのが印象的であった。14カ月、バイバイと言うようになった。しかし、その後有意語はほとんど増えなかった。1歳半健診では様子を見るように言われた。3歳少し前に、自閉的傾向を指摘され、市の治療教室に通い始めた。

2歳半までに10まで数えられるようになった。「3」へのこだわりがあって、テレビのチャンネルも「3」、クイズの答えも「3」でないとパニックを起こす。些細な変化にも敏感に反応してパニックを起こし、話したことばはいまだ見られない。味覚にも敏感で、偏食が強い。

初回面接時の特徴は以下の通りであった。何かに興

味が惹かれると、直線的に走っていき、手で扱おうとする。衝動性が亢進している。固執傾向が強く、同一性保持を認める。マイペースであるが、母親からスタッフにあいさつをしろと指示されると（バイバイ）と言って挨拶をする。要求があると母親の手をとって動かそうとするクレーン現象がある。印象的な姿勢として頻回につま先立ち歩きをしている。知覚過敏で、筆者らの母子臨床の場である Mother-Infant Unit (MIU)<sup>2)</sup> のカメラの動く音にも敏感に反応して、耳を塞ぐ。周りの人々に対して用心深い。

MIU での関係支援が開始され、当初の母親と I 男のコミュニケーションのずれが次第に修復されていったが、母親は I 男の一見独特なことばの使い方に戸惑うことも少なくなかった。しかし、I 男の発語の意図を感じ取ることによって、母親は彼のことばのもつ意味を徐々に把握できるようになった頃 (I 男 5 歳 6 カ月) のエピソードである。

朝の外出時、母親が I 男に靴を履かせようとする時、(P ノック (P の模様が入っている靴) ビショビショ) と言って泣きそうになっている。I 男の様子からは、どうもその靴を履きたくないらしいことはすぐに察しがついたが、昨日雨が降ったわけではないので、その靴は濡れていなかった。彼は母親が履かせようとした靴ではなく、以前履いていたお気に入りの靴を履きたかったようであった。そのことが分かった後すぐに母親は次のようなことを思い出した。ある日、雨が降って自分の気に入った靴が濡れて履けなくなってしまったことがあった。その時、母親は何度も「靴はびしょびしょで履けないね」と説明してやった。I 男はそのことを記憶していたのであろう。(ビショビショ) と言えばその靴を履かないですむと考えたのではないかと母親は思ったという。

これら 2 例に認められた自閉症にみられる言語表現は、従来、主客転倒や隠喩的表現<sup>3)</sup> などの言語発達病理として論じられてきたものであるが、原初的コミュニケーションの生成過程の中で位置づけるとどのように捉え直すことが可能であろうか。

### 原初的知覚様態について

一般にわれわれは周囲にある (刺激) 対象を自分とは別個の存在として明確に区別して捉えている。そこでは主体 (自分) と客体 (刺激対象) は

明確に異なったものとみなされている。しかし、乳幼児期早期においては、主体の動きや気持ちの変化によって主体と客体は一体化されやすく、そこでの対象の把握の仕方は非常に力動的となりやすい。このような力動化によって彼らにとって対象は生きているように見え、実際には生命のないものでさえ、ある内的な生命力を顕わにしているように捉えられる。そこでは主体と客体は一体的、合一的、融合的な状態となっている。(主体) と (客体) というように分節化されず、(主体-客体) という未分節な状態にある。それと同じように、(運動) 過程、(知覚) 過程、(情動) 過程などの心的過程も各々は分節化されて機能せず、(運動-知覚-情動) 過程として合一的、共時的に機能していると考えられている。原初的知覚様態とは、このような対象世界の把握のあり方を意味している<sup>4)</sup>。

われわれは体験世界をことばによって切り分ける (分節化する) ことによって意味づけ表現し、体験世界を他者と共有するという術を持ち合わせているが、このような原初的知覚様態に強く支配された子どもの体験世界の把握の仕方はわれわれのそれとは大きく異なっている。彼らは体験世界を分節化することはできず、生々しい (運動-知覚-情動) 体験として記憶していると考えられるのである。

### 原初的コミュニケーションについて

原初的コミュニケーションとは先に述べた原初的知覚様態に支配された状態において展開するコミュニケーションの様態を意味するが、それはなんらかの媒体 (話しことば、身振り) を介したコミュニケーション (これを筆者は象徴的コミュニケーションと称している) ではなく、直接的、無媒介的、共時的、合一的なコミュニケーション世界である。そこでは情動が中心的役割を占め、あらゆる刺激のもつ動きの変化がとりわけ敏感に知覚される。情動の興奮や鎮静など、その高低、強弱、リズムの変化が鋭く感じ取られる。このような性質のコミュニケーションであるため、基本

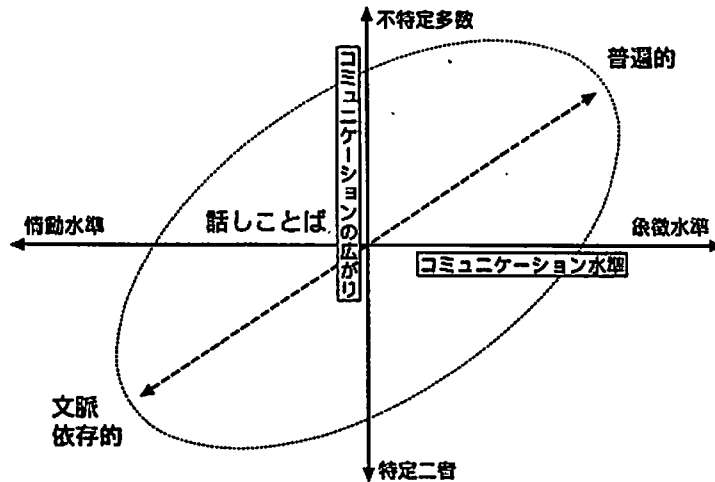


図1 コミュニケーションの両義性とコミュニケーションの広がり<sup>2)</sup>

的には当事者自身はこのコミュニケーションの実態そのものを直接的に意識的に捉えることは困難である。つまりは意識の介在しないコミュニケーション過程であるというところに大きな特徴がある。

### コミュニケーションの両義性と コミュニケーションの広がり

通常のわれわれのコミュニケーション世界も、けっしてことば（字義）のみによって展開しているのではなく、さほど意識化することなくとも気持ちが通い合い、互いの気持ちを察しながらことばを発するというように、情動（気持ち）が基盤に流れている。それなくしてはコミュニケーションが円滑に展開することは不可能である。このようにコミュニケーションは、字義的な一面と情動的な一面という両義的な性質が時と場合によって微妙なバランスを保ちながら展開しているものである。このようなコミュニケーションの両義性はコミュニケーション世界の広がりとは密接な関係にある。

図1に示すように、生まれて間もない子どもと養育者という特定二者間のコミュニケーション世界では情動水準のコミュニケーションに強く依存し、次第に社会性が広がっていくに従い、ことば

や身振りといった象徴機能を有する媒体を介したコミュニケーションへと進展し、その媒体もより一義的で普遍的なものが志向されるようになっていく。

ここで重要なことは、原初的コミュニケーション世界にあっては、彼らの発する声やことばの意味が文脈に強く規定されていることである。ことばが一義的な意味を有さず、文脈を共有することによって初めて明らかになっていくところに大きな特徴があるということである。

情動水準のコミュニケーションである原初的コミュニケーションの段階からわれわれのようなコミュニケーション段階へと発達していく過程の内実はどうのようなものか、そのことを発達論的に明らかにしていく作業が、自閉症のことばの問題を考える上で不可欠な課題となる。そこで先に提示した自閉症にみられることばを原初的コミュニケーションとの関係でどのように捉え直すことができるのであろうか。

### T男のことばと原初的コミュニケーション

当初、T男自身も入所したことによる不安が強かったと思われるが、N男の騒々しさが伝染するように不快な情動反応が引き起こされ、T男の不安をさらに増強させるような状況にあった。この時の

T男の状態は、他者の情動状態に同調するようにして自らにも不快な情動が引き起こされてしまうという、原初的知覚様態特有の一体的、融合的な体験となっていたことが推測される。その後、自分に同様の不快な情動が生じた際に、彼の中には過去のN男の騒々しい苛立った状態をともにした情動体験が想起されたのであろう。自分の中に同じような情動が引き起こされた際に、その表現型として(N男クン、サワイデイル)と言わしめたのではないかと考えられる。

本来われわれであれば、以前N男くんが苛立って騒いでいた時のように、今の自分は苛立っています、と表現すべきところであろうが、彼は(N男クン、サワイデイル)と、まるで実際にN男くんが騒いでいるかのように表現している。厳密に字義的に見ていくと、そのように受け止めざるを得ないが、実際のT男は自分の苛立ちを表現して、なんとかしてほしいという気持ちを伝えたかったのである。そのことはその場の指導員の適切な対応によって確かめられている。ここで注意を要するのは、T男にとっては(N男クン)(サワイデイル)などのようにことばそのものが本来の分節化された意味を担っているのではないということである。彼が(N男クン、サワイデイル)と言って表現したかった体験とは、まさにN男が騒々しくしていた際に自分も同様に苛立った不快な情動状態にあったという一連の文脈全体を指しているのであって、(N男クン)が(騒いでいる)というふうに分節化された状況の説明ではなかったということである。ここに(主体)と(客体)とが分節されていない心的体験としての(主体-客体)の融合した原初的コミュニケーション世界をうかがい知ることができる。

### I男のことばと原初的コミュニケーション

I男のエピソードでは、お気に入りの靴を履きたくても雨に濡れたために履けなかったという過去の不快な(嫌な)体験が記憶され、その後再び同じような不快な場面に遭遇したことによって、過

去の体験が想起されていることがわかる。ここで過去の記憶を想起させたのは、お気に入りの靴を履きたいのに履けないという不快な情動を中心とした体験であることが推測されるが、彼にとってその時の体験は、雨が降った、靴が濡れた、その靴が履けない、だから悲しいなどと分節化されて記憶されていたのではなく、その時の体験は情動体験を中心に、文脈全体が未分節な形で記憶されていたのであろう。その情動体験とともにもっとも印象深く(強烈に焼き付いて)記憶されたのが母親の語ったことば(…ビショビショ…)であったのである。

このように考えていくと、彼の発した(ビショビショ)ということばの背景には、ある日のお気に入りの靴が雨に濡れて履けなくて嫌だったという体験全体が生き生きと想起されていることが想像される。すなわち、このような体験全体は「地」として背景に流れながら、(ビショビショ)ということばが彼には印象深く記憶され想起されたことによつて、このことばは図として機能しているといえることができる。ここにみられる記憶は、単に情動、運動、知覚、各々のいずれかの心的過程が切り分けられた形ではなく、生々しく未分節な形で記憶されているが、その際に記憶想起の引き金となっているのは、不快な(嫌な)情動であると考えられるのである。

### 原初的コミュニケーションと関係発達支援

原初的知覚様態が活発に働いている自閉症の人々は、われわれのように対象を切り分けることなく、知覚し、記憶している。対象とどのような文脈の中で関わり、そこでどのような体験をしたか、それを包括的に(運動-知覚-情動)体験として記憶していると考えられる。そこでは彼らは(刺激)対象と融合し、一体となって事象を体験している。そのように体験世界は記憶され、その後同じような情動状態になった際に、その体験世界の記憶が生々しい形で想起される。その際、彼らがその体験世界で最も印象的に記憶に留まっている「こと

ば」や「行動」を再現して、彼らなりの表現がなされているのである。

ここで重要なことは、彼らの想起を促しているのが、ある種の強烈な情動体験であること、そしてそれに付随して記憶されたことばや行動が再現されていることである。つまり、あることばや行動は彼らのある情動体験世界が想起されていることを示すとともに、その中で彼らの自己主張（表現）を促したのが、その情動記憶であるということである。

こうしてみると、彼らの発する一見理解困難な表現の裏には、彼らのある強烈な情動体験の記憶が存在していることがわかる。その情動体験の中身が共有されることによって、初めてわれわれは彼らの体験のもつ意味を捉えることができるが、それを把握するための重要な鍵は、われわれが彼らの気持ちのありようそのものを感じ取る（共感する）ことができるか否かである。

われわれは彼らの「ことば」を聞くと、まずは「ことば」の持つ一般的意味（字義）を思い浮かべ、理解しようとするが、原初的コミュニケーション段階において、自閉症の人々のことばには本来ことばが持っている分節化された字義の意味合いはきわめて薄く、彼らの〈運動-知覚-情動〉体験の記憶とそこでの強烈な情動体験に大切な意味があるということである。

ここでわれわれにとって関係発達臨床学上重要な関わりは、彼らの表現したい気持ち（つまりは「いま、ここで」の気持ち、あるいは過去の想起している体験内容の情動的意味）を共感的に理解し、それにふさわしいことばで投げ返す（映し返す）

ことである。

彼らは自分の体験世界の（常識的）意味を獲得することに多大な困難を抱えていることは確かであるが、それは彼らとその体験そのものを持つことができないことを示しているのではなく、「いま、ここで」彼らの（情動的に）体験している内実をわれわれの文化的枠組み（ことば）で切り分けることが困難であることを意味している。ここに自閉症児のことばの問題の本質があると考えられる。よって、われわれが自閉症の人々のことばを育むためには、単に上辺のことばを与えるようにして教えるのではなく、彼らの体験様式を共感的に捉え直し、その体験世界にふさわしいことばによって映し返していく作業が求められているのである。

社会福祉法人ふじの郷さつき学園指導員岩村幸子氏から事例T男について多くの示唆を得た。心より厚くお礼申し上げる。

## 文 献

- 1) Kanner, L.: Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. *American Journal of Psychiatry*, 103; 242-246, 1946.
- 2) 小林隆児：自閉症の關係障害臨床—母と子のあいだを治療する—。ミネルヴァ書房、京都、2000.
- 3) 小林隆児：自閉症とことばの成り立ち—關係発達臨床からみて原初的コミュニケーションの世界—。ミネルヴァ書房、京都、2004.
- 4) Werner, H.: *Comparative Psychology of Mental Development*. International University Press, New York, 1948. (鯨岡峻、浜田寿美男訳：発達心理学入門。ミネルヴァ書房、京都、1976.)